

巨乳

令嬢

MC

学園

洗脳公認強化計画

おっぱい
おっぱい

巨乳令嬢MC学園

洗脳ハイレズ強化計画



著：布施はるか
画：スカイハウス
原作：ルネ

OB オトナ文庫



女性の本懐だといったカンジで(精液至上主義)の暗示を刷り込んでおいた。そのことを実感しながら、僕はもう少し現状を確認することにする。

「あの……ごめんなさい。でも、ちょっと出しただけで、どうしてそんなに大騒ぎするの？」

「何を言ってるの……？ 精液は、女の社会的な価値を証明するうえでも、もっとも貴重なものに決まっているでしょう！」

「僕をバカにした様子で、アリスが重められた価値観を披露する。」

「ナマの排泄物を提供するためにここにいるはずですよ。取引されるものです。あなたは、その貴重な精液を提供するためにここにいるはずですよ。アタシの許可なく射精とか、赦されなさいよ。」

「アリスと理央も追従するが、理央の言葉はアリスの鞭に障ったらしい。」

「神楽さん、これはあなただけのものではありませんわ。加減を間違えて暴発させたあなたは、むしろ遠慮するべきでしょう？」

「冗談！ いくらアリスでも、それは聞けないですよ。チンポ抜いたのはアタシの仕事だし！」

「やはり、(精液至上主義)というマインドコントロールは、恐ろしいほどに彼女達の意識に刷り込まれていた。」



僕をバカにしきっていたアリスと理央が、まさか僕の精液を求めて小競り合ひまでするなんて……

「わかったよ……ちゃんと精液は出して、いくから、ケンカしないで舌で舐めとって、ついでに残ってるぶんも採取してくれよ？」

「フン！ 言われるまでもないわ。すぐに奥置しなくてはね……んレロ……レロッ……」

「あーっ!! なに、フライングしてんの! アタシも……んっ。レロ……レロッ……」

「扱ってないでください。ちゃんと順番どおりに……。あ、あ、あ、もう! レロ……んっ。一度始まってしまえば、あとはもう順番を切ったように一斉に舌が振りだす。まず、たっぷりの精液が残った亀頭を、アリスと理央が我先に舐めとり始める。その隙間を縫うようにして、友里子も巧みに、垂れた精液を吸い上げていく。……」

「わ、わたしは……、ここに残ってるほう……するね。あ……んむ。チュプ……」

「遠慮がちなのは親り合ひに参加こそしなかつたが、二人が群がる亀頭から下の根もとに残っていたがんと丁寧に舐めた。」

「チュプ……んっ。ふ……んむ……。やっぱりこの味……、んチュプ、凄く辛へな気持ちになれるの……んレリ……」

「その薄けた表情は、もちろん演技でできるものじゃない。強制的にさせられているのではなく、彼女達は精液採取を当然のこととして積極的にフェエチャオに臨んでいるのだ。」

「んっ。はあ……チュプ……。もう舐めさつてしまつたわ……。んあ……。新

しいのは……んリユ……。まらなの……？」

「僕の学園生活における諸悪の根源だつたアリスがねだる。」

「吉祥寺さん、ずっと同じ場所をしては刺激が単調になつてしまいます。レロ……。もつと様々な場所を……んチュ……。舐めていきますよ。」

「アリスの片棒を担ぐ友里子が、さすが優等生の風紀委員らしく親友をたしなめた。もつと、すかさず反駁したのは僕の天敵だつた理央。」

「んっ。そんなこと言つて、場所を変えた瞬間、そこを乗っ取る気なんですよ……。たくっ! 油断も隙もねえよ。」

「くだらないことを。わたしはただ、より効率的な射精への導き方を言つただけですよ。」

「理央の言葉がアリスに向く、もちろん、アリスが黙っているはずはない。もうちょい詰めてつての。」

「どうして私があなたに遠慮しなくてはならないんですの? レロ……んっ。チュプ……」

「ここは、ずっと私の場所ですわ。はんむ……」

「僕の肉棒を夢中で舐めながら、時折お互いを牽制しているのがなんとも滑稽だつた。思わず苦笑しつつ、僕は鋭い合図二人に言つてやる。」

「先づも悪くないけど、今はくびれた皮の締りめのところのほうが出しやすいかも。」

「そんなこと、あなたなんかに言われるまでもないわ。ん……。あむっ」

「この、特に匂いが強い部分……ですわ。んっ。ピチャ、んう……。少し汚れが……」

「つい昨日ポストワアーンしたばかりのくせに知ったかぶりをするアリスに対して、友里子のほうはまだ素直だ。ただ、初めて目にする船場の壁においには腰が返っている」「ハハ……ごめんねでも、チンカスも一掃に依拠とつていくと、射撃も近いからね」「そんな出仕に理央がまっ先に喋っていた」「んんん、じゃあ、もういっつ、んんん……レルレロ……、レロオッ」「すくそうして好きなところを……！ まったく……、どれだけ育ちが悪いのかしらっ」「夢中じゃあぶつてアリスに言われたくないし……、はんむ……、ホントだ……ピクピクしてんの……」

「暗水をかけてあるとはいえ、面白いように指差に従ってくる。実のところ、せせせと根拠を積み立てていることを含めた四人のなかで、フェラチオ未経験なのはアリスだけだ。ほかの三人は、昨日の愛女喪失の時にしゃぶらせている。まあ、それでもおうちに経験がないのはみんな一掃、なんどなくの雰囲気だ。振れているから、コップもくわかってないんだ」「フフ……、それでも必死に群がって……、あつ、同時に舌を重ねた……、くっ」「何をニヤニヤ見ているの？ 気持ち悪いわね……、レロ……、んぶっ、チュブ……」

「悪態をつきながらも、アリスは自分のしていることにまったく違和感を持っていない。この、後の掌の上で転がっている感覚は確かに愉快だ。」「んっ、ふ……、チュブ……、んむっ……、レロ……、あ……、今、反応がありました」

友里子が言うと、こはるも丸くした目を僕に向けてくる。」「根拠のほうも、覚えてきてるよ……？ 池ノ上くん……、気持ちいいの？」「うん、気持ちいいよ……、んっ。このままだと、そろそろ出ちゃうかも……」

「実際、限界に近い。腰の重なりがゾワゾワしてきた。」「あむっ、チュブ……、今度は出る時、ちゃんと言えよ？ しつかりアタシが飲んだげるからさっ」

「何を勝手なことを言っているの？ これは私のものよ。あなたに誰阿なんかいわ」「百祥等……、んっ、わたしも地味はよくないよ……、んチュブ、思いますの……」

「池ノ上くん……、んっ、チュブ……」落ちて着きなくし始める。みんなが精液を求め僕の反応を見て、それぞれがソワソワと落ち着きなくし始める。みんなが精液を求めて……、これまでの学園内のピエラルキを微物に見え隠れさせるから、精液のための絶好の位置をキープしようとする。」「大丈夫だよ、ちゃんと公平に、みんなの顔にぶっかけてあげるから。んっ、く……」

「ぶ、ぶっかけ……？」「つまり……、(顔面射撃)という……、ことですか？」「アリスはキョトンとしていたが、友里子は知識だけならあるらしい。」「うん、それなら、みんなが平等に精液を浴びることができるとして……」

「はっ。池ノ上にしちゃ、わかつてんじやんか？ なんでもいっから、ビュルッと出しちゃ」

「ん……、一生懸命するから……、いっばい出してね……、レロ……」

「派手さと地味さが好対照な理央とはるが、それぞれの個性そのままにねだつてくる。もう彼女達四人の頭の中は精液のことばっかりなんだろう。射撃が近づくにつれ、いっそう舌先に熱をためて、今か今かと訪れるその瞬間を心待ちにしているように見える。」「レロ……、あんむ。ピチャ……、んっ。あ……、んむ……、まだ、なの……、レロ……」

「震えが大きくなっていきますから、もう少しはです……、んチュブ……、レロ……」

「チュブ……、さつきはすぐ出したクセに……、んっ、今度は中途半端に焦らしやがって、このっ！ チュバ……、レル……、んチュブ……、いつでも……、いっばい……、んチュブ、出して……、ね……」

「四方陣から一斉にもたらされるぬめった舌先の快感に、我儘なんかできるはずもない。」「んく……、フフ……、ん……、出るよっ、そろっ、浴びろっ！」「ドクンという鈍い衝撃が数回に及び、直後、亀頭の先端から白い精液が流る。」「さやあつっ！ んん……、あぶっ、か、顔に……、何ぞっ？」「んん……、濃密なのが……、んぶっ、ねっとして糸を引いて……、んチュブ……、あ……、この匂い……」

「ん……、マジでクラクラくる……、ヤバ……、んっ、チュブ……、レロ……、こんな

「ん、とまんないでしよ……、レロ……」

「ピチャ……、んチュブ……、はあ……、美味い……、んんっ、池ノ上くんの精液……、んっ、凄く濃いよ……」

「四人まとめての顔面射撃に彼女達は一瞬だけ目を丸くしたが、すぐに粘りつく精液の感触に表情を落させていく。」「んっ、レロ……、まったく……、こんな最先に出されたら……、頼めにくいじゃないの……、んんっ、チュブ……」

「それでもアリスはアリスのまま。相変わらずの言葉遣いに、友里子がそとと囁く。」「百祥等……、ん……、わたしは頼めどりましようか？」「レロ……」

「あ……、いっ、いいいよ、これは私が自分です……、レロ……」

「エリートのお嬢様が台なした……、そう僕がツッコミを入れるまでもなく、理央が小バカにしたように喋る。」「ブッ、盗られそうになつて、必死じゃん！ 友里子も油断も隙もないし！ チュブン」「べつに、わたしに他意はありません。ただ、より徹底的な搾取を提案しただけです。レロ……」

「いかにも友里子らしい言い種だ。でも、彼女には、(精液中の)暗水をかけている。本音じゃどう思っているのやら……」

「そんな三人をよまに、ひとりこはるだけがひたすらうらつとらしていった。

